

〈小学校教員養成課程の「教科専門教育科目」(小専科目)と「教材研究」(初等教科教育法)との関連に関する研究〉

## 「小専国語」と「初等国語科教育法」との 課程編成上の関連について

村上直治(国語科教育)

### I まえがき

小学校教員養成課程に学ぶ学生が、専門科目として履修する科目「小専国語」と「初等国語科教育法」との間には、どのような関連があり、また、なければならないか。これを明らかにすることを目指しての模索状況を、以下に報告し、各方面からの御意見を頂戴したい。

先に、紀要第11号別冊と第17号別冊その1において、渡辺と村上の報告により、「小専国語」の実践状況と工夫の種々の試みを記した。従って、本稿では、おもに「初等国語科教育法」の実践状況と工夫の試みを記したい。そしてその報告の上に立って、両科目の課程編成上の関連の仕組み方を問題提起してみたい。それは、両科目の特質に関する問題提起ともなろう。

### II 「初等国語科教育法」の外的構造

#### 1 「国語教育」と「国語科教育」

1990年度後期講義の1コマに、「福島県国語教育の現状と問題点」と題する特別講義を設け、福島市内の校長さんに講師をお願いして実施した。経験三十数年の教師であり、ベテラン国語教師である講師と事前打合せをしたとき、国語科教育のことばかりでなく、国語科外の日常的な国語の教育についても是非話題のひとつにという話となり、していただいた。学生の感想文によると、非常な興味と切実な関心呼び起こされた話題のひとつだったようである。

さて、国語科教育のことを、単に「国語教育」と縮めて言うてしまう場合が多い。しかし、「国語科教育」と「国語教育」とは、厳密には区別して使われるべき語である。「国語科教育」は、国語科という教科の学習指導の時間に行われる国語の教育を指す。それに対し「国語教育」は、「国語科教育」を含め、他教科や教科外のすべての場で行わ

れる国語の教育全体を指す。学校教育に限定せず、極めて広義に一般的に言えば、日本語使用を主とする生活をしていて日本を母国とする人々が、相互の間に生起せしめている母国語教育の事態を指して使われることは、言うこともできよう。

国語科教育を考えていく場合に、この「国語教育」という大きな観点を忘れてしまうと、幼児教育や生涯学習との関連、他教科・教科外・関連諸科学とのつながり等において、閉鎖的になってしまう危険がある。学校教育全体の中での国語科教育の位置づけを見失うおそれがある。前記特別講義の内容設定にあたって配慮した意図もそんなところにあったわけである。

「国語科教育は、学校教育において行われる国語教育の中核であり、基礎である。」<sup>注1)</sup>

このような位置づけとともに、一方では、次のような他教科等との関連にも、まず留意して、初等国語科教育法の授業展開を実践してきている。

#### 2 「理科教育」と「国語科教育」との接点等

「国語教育」は、前項に述べたように、どの教科でも行われており、行われねばならないが、ここでは、「理科教育」と「国語科教育」との接点の問題を事例として、他教科教育との接点のあり方をみておきたい。

板倉聖宣氏が25年ばかり前に、「今日の『理科』教育には、科学教育なら当然含めなければならぬものが欠けて」とし、一例として科学書の読書指導欠如を指摘したことがあった。<sup>注2)</sup> 今、国語科教育における説明的な文章の読みかた指導とかかわって、あの指摘を考えてみたい。

板倉氏は書いている。「『どのような科学書をいかに読むか』という問題は科学教育の重要な一環です。ところが、よほど変わった先生でなければ、『理科』の時間に科学書の読書指導をやろうとはしません。『多くの人びとは、『理科』の時間とい

うのは、実験や観察をする時間だ、と思いこんでいます。(中略) これは科学者の研究の一面しか見えていない考え方といわねばなりません。『科学者は自分自身で自然に問いかけて新しい事実や法則を見いださなければなりません。しかし新しい発見ができるようになるためには、その前に、たくさんの本や論文を読んで他の科学者が発見したことを知ることが先決です。その論文や本に書いてあることのうち、『これはあやしいぞ』とか『ほんとうにそうかなあ』と思ったことは自分でも実験しなおして確かめてみなければなりません、他の科学者のやった実験の全部をやりなおさなくたってよいのです。』『科学というのは社会的な財産です。』『たくさん専門の科学者たちが分業で築きあげたことをいち早くとり入れるような態度のほうがよほどたいせつでしょう。』

以上のように板倉氏は、自然の事物から直接学びとる知識より、他人から学びとる知識の方が圧倒的に多い現代社会における、科学教育のあり方の大事な一面を強調的に示している。

そして、「今日の小・中・高校の科学教育では断片的な雑多な知識は膨大につめこんでいながら、科学上のもっとも基礎になる概念や原理・法則となると、なにひとつ確実に教えきっていないというのが実情。『今日までの理科教育では、社会に出てから直接役に立つかも知れないことのひとつひとつ個別的な知識を、片っぱしから教えようとするから無理がおこる』と指摘し、『社会に出てからそれぞれの必要に応じて特殊な知識をとり入れるということを前提とした教育では、当然教育の内容も原理的なものに集中させなければならない』というふうに主張をしていたのである。

国語科で説明的な文章の読みかたを指導する場合、板倉氏の科学書の読書指導と重なる分野も含めて行なっている。読みかたという言語活動の指導の一部が、理科教育とオーバーラップする接点を持っているわけである。この点で、ひとつの学科課程編成上の協議題が見えているようにも思えるのである。

理科教育と国語科教育との接点の問題は、他の教科教育と国語科教育との接点の問題、道徳や教科外指導との接点の問題を示唆している。初等国語科教育法の授業では、このような点に留意して進めてきたつもりである。

### Ⅲ 「初等国語科教育法」の内的構造

#### 1 目的・内容・方法

わが学部はこの科目の担当者である筆者は、およそ次のような目的把握のもとに、この科目の授業を展開してきた。

学生たちに、授業づくりを中心とした小学校国語科教育のあり方に関して、課題の発見とその解決を図らせていく。その過程を通じて、初等国語科教育についての体験的会得と理論的把握を、次第に進めさせていき、教師としての力量を培わせていきたい。

以下、この目的について若干の解説を試みるかたちで、科目の実践状況報告を続ける。

#### (1) 教官は「何を」「どう」教えているつもりか

何を教えているのかと問われれば、上記のように、授業づくりを中心とした小学校国語科教育のあり方と答えることになる。実際そうしてきたつもりでもある。この場合、「何」にあたるのが、「あり方」である点には留意しておきたい。授業のための教材選択、教材解釈、授業案づくり、授業の展開、授業の観察と記録、授業の評価、授業関係年間計画等、すべては、そのあり方が課題となるのである。したがってこの科目では、全身的な体験的会得と、高度な自覚(対象化)によって可能な理論的把握とを、共に保証するような「方法」が求められるのである。いわゆる演習の必要も随所に起こってくるのである。「内容」が必然的に、ある「方法」を求めていると同時に、ある「方法」が「内容」の特質を規定しているわけである。この相互規定性は、「目的」と「内容・方法」との間でも考慮しておきたいことである。最終的なかたちとしては、第一発信者のような位置に収まる「目的」も、「内容・方法」に支えられてこそ成り立っているわけである。

さて、筆者がこの科目でやっているつもりのことの一部をやや詳しく記すことにしたい。あとで「小専国語」との関連を考えるためにも。

1年間を通しての主な内容項目（'90年度）

月	項 目	備 考
4月	I 初めに (1) 豊かな学習体験の積み上げを！  (2) 「個人⇄班⇄全体」の交流によって、各自が発見的体験をつくり出していくように！ (3) 年間の予定は？	○Tからの提起。 ○ノートづくり、レポートづくり（個人、班）、5分間カード記述等をしながら進めていくということ。 ○班組織をつくった。 ○大項目で示した。
	II 初等国語科教育法の出発点  (1) 「初等国語科教育法」とは、どんな科目か。  ①「しり取りあそび」の体験から考える。 ②文章（韻文・散文）を読む体験から考える。  ③授業記録を読む体験から考える。  ④諸事象追究のあり方（三段階）をまとめる。	○文部省指導要領についての学習も位置づけた。  ○ことばあそびの事象を見つめた。 ○「読む」という事象を見つめた。（草野心平の詩、「春の歌」を読み合った。） ○授業という事象を見つめた。 ○問題を持つ→原理・法則を見抜く→方法をあみ出す。
5月	(2) 教育の場で必要不可欠の配慮事項について考えてお	○(1)の①②③の体験を思い出したりして考えた。

	こう。  ①自己開放（開放）ということと集団の組織とその成長ということ。 ②人間には、自他納得への基本的欲求があるということ。  III 初等国語科教育法の実践的研究  1. 言語活動の教育 A 「表現」領域…書く・話す（付「言語事項」）  (1) 作文の教材研究 話し方の学習も並行させつつ  ①児童作文の読み方（集団的研究）。 ・班レポートづくり ・班レポート検討の話し合い  ②児童作文の読み方（個人別研究）。 ・個人レポートづくり  (2) 家庭・地域と学校での作文教育  (3) 「表現」指導の全体展望と課題について	○諸実践記録にある名高い例も材料にした。  ○班での話し合いの体験を材料に考えた。  ○指導要領にある国語科の目標を研究した。  ○プリント「よい会議」, 児童作文（6月から9月にわたって）26点を渡している。 ○共通教材「かず子うしはびじんです」（小2）。 ○作文の授業研究記録プリントを渡し、随所で活用。  ○夏休み中の作業課題。  ○実地指導講師による特別講義。
6月		
7月		
9月初（6月）		
9月		

10月	<p>IV 初等国語科教育法の実践的研究 ——後期——</p> <p>1. 言語活動の教育 B 「理解」領域 …読む・聞く (付「言語事項」)</p> <p>(1) 授業記録の研究から授業案づくりへ</p> <p>①「読む」ということ</p> <p>読んで楽しくなる。楽しみながら読む。読んで味わう。味わいながら読む。</p> <p>・表象化なくして読みは成立しない。</p> <p>・自他が納得し得る豊かな解釈を誰もが求めている。</p> <p>②文学教材による授業の記録</p> <p>・永田喜久氏の「ごんぎつね」の授業記録を読み以下の研究を進める。</p> <p>・話者と作者との区別，文法的語意的意味の分析手法に</p>	<p>○後期予定の中項目まで（Ⅳ－1－B－(1)からⅤまで）提示。</p> <p>○音読・朗読・黙読そして微音読をやってみた。</p> <p>○ノンセンス詩，童話（「ごんぎつね」）を，個別音読や群読で味わった。</p> <p>○表象化の原理と自他納得の原理として上記読みの中で一応の確認をし合った。</p> <p>○読んで生じた個々の人々の表象の間には，共通性と個性的な相異とがあることを確かめた。</p> <p>○教材と，全14時間扱いのうちの第1～3時目までの記録を，授業中に読んだ。</p> <p>○「しりとり歌」「舌もじり歌」を活用した。</p> <p>○動きのすがたを</p>		<p>ついて，記録に基づいて考えてみる。</p> <p>・解釈における特殊↔一般具象↔抽象について考えてみる。</p> <p>・前理解から新理解へのプロセスを実際に即して自覚し合う。</p> <p>③文学教材による授業の授業案づくり</p> <p>・第1回め授業案づくり（復元的「授業案づくり」）。</p> <p>・第1回め授業案についての手直し。</p> <p>・第1回め授業案づくりの経験に基づいて「ごんぎつね」第2章を読み深め合う。</p> <p>・第2回めの授業案づくり（自立的な授業案づくり）</p> <p>・第2回めの授業案づくり体験の上に立って，文献に学ぶ。</p>	<p>表す表現の事例で文法的語意的意味の追究を試みた。</p> <p>○永田氏の「ごんぎつね」の授業第3時目（第1章冒頭段落）の記録を読み，この授業実現のための案を想定して書いてみた。</p> <p>○文法的語意的意味の追究のしかた，視点（内の目・外の目）や対比のとらえ方を学習し合った。</p> <p>○「ごんぎつね」第6章後半（作品終末部）取り扱いの授業案をつくった。冬休み直後提出。</p> <p>○授業の実際，案のつくり方，教材の読み方などを，学び合った。</p>
11月			12月		
			1月		

	④説明的文章教材による授業について	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 文学教材による授業と大きく共通している。</li> <li>• 相異点は、実物や実際の照合、あるいは一般的に言われていることとの照合が必要なことである。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○二大原理は共通であることを確かめ合った。</li> <li>○三つの教材例で、教材解釈のしかたや、授業での取り扱いかたについて考えた。</li> </ul>
2月	2. 言語の教育 〔言語事項〕をめぐって		<ul style="list-style-type: none"> <li>○文部省「学習指導要領」についての研究を各自まとめるよう勧めた。</li> <li>○(3)は、「言語事項」「表現」「理解」にわたる総合的学習で、「かな文字学習」が主である。</li> </ul>
	(1) 「理解」や「表現」の中での指導		
	(2) 取り立て指導		
	(3) 入門期指導と言語事項について		
	V 初等国語科教育法の諸課題	○時間不足のためプリント資料配布のみにて終わった。	
(1月)	VI 福島県の国語教育の現状と問題点	○実地指導講師による特別講義。	

※上記のほか、時間外に、附属小学校の授業参観を実施した。45分の授業観察と、授業づくりに関する授業者講話の聴取及び質疑を、学生たちは体験した。

(2) 学生たちは「何を」「どう」学習しているかをどう学習しているかがわかるためには、学

生の学習状況や学習結果に関する多面的かつ吟味された客観資料が要る。しかし、本稿では、次ページ以下3ページにわたる学生のカード記述例を示すのみにとどめたい。スペース等のこともあるが、このようなところで公表して有効に使えるハンディな資料は得られなかったのである。

授業時間の終わり約5分間に、その時間にかかわる自由な感想を書いてもらう。そのカードを次時までに読み、調べて、次時以降の授業に生かす。特に学生ひとりひとりの記述に見られる発展の方向とか可能性の芽に留意し、自分で自分を育てる動きを、より促進させるように働きかける。学習者の動態に即した授業を、などと説く教官が70名前後のクラスなど3～4組持って、こんなやり方にとどまっているのが実情である。とにかく、(1)と対照しながら見ていただきたい。学生の了解のもとに二人のカード記述を掲げたが、後期の学生の分には、若干の削除がある。

#### IV 「小専国語」と「初等国語科教育法」との関連を考えていく上での問題点

##### 1 科目の目的・内容・方法上のつながり

###### (1) 内容上共通する面——その洗い出しへ

初等国語科教育法の「表現」や「理解」の学習で、語的文法的意味の追究が、基本的に重要であることは言うまでもない。また、その際の知的要素は、「小専国語」の研究内容になっているものである。しかし、これまで、必ずしも両科目間で生き生きとした共通内容になっているとは言い難いものがあった。それは、これまでの調査資料やカード記述などから言える。科目履修前までの理解内容や、理解と記憶把持の動態をどうとらえてきたか。科目の授業の展開にあたって、そのとらえたものをどう生かしてきたか。こうした観点からの内容上共通する面を洗い出し、二つの科目間の関連を明確化していく必要がある。

###### (2) 年次段階的つながり

両科目の内容は、本来は相互規定的であるとも言えるし、原理の学と応用実践の学に分けられる一方性のものとも言えよう。しかし、福大国語科としては、紀要17に記したように、カリキュラム編成上、後者の立場で、「小専国語」→「初等国語科教育法」という、年次段階的つながりを仕組んだ。このような仕組みが、どのような長所と短

## 〈感想カードの記述例 1〉

- 4.24 近頃 よく感じることであるが「ことば」というものは いくつかの意味をもって いるのだろうか、ということを考える。話す時 私たちの口から音声としてで るものも 又 こうして字という形で存在するものも すべて「ことば」と思う のだから そこから また いろいろな形や意味で 枝分かれしていると考え。 「ことば」の持つ神秘さを 少しでも この講義で 感じとれれば 私個人と しては とてもうれしいのだが...
- 5.8 私は 今日の「春の歌」を読んで 少し悲しくなりました。なぜなら 私がこの 詩を見て 最初に 感じてしまった事が どれか 対句だろう、倒置法などはある だろうか、ということだからです。  
詩を読む事で 大切な事は その詩の内容を把握する事だと思えます。しかし 今の 受験戦争の中で 無意識に身につけてしま、た読み方を 今日 感じてしま い 非常に残念です。
- 5.15 今日の作文の会話部分の所で考えた事を書きます。「みずういはびじんです」とい う作文での会話は その土地の方言をそのまま文字にしています。これは 非常に感じました。方言には 標準語では表現できない その土地の人が持つ感情が入っていると思えます。  
正しい言葉づかいを知る事も大切ですが 自分の感情を 素直に表現できる方言を 邪険にあつめてはいけなないと 私は 思います。
- 5.22 今日見た授業研究の資料の中に「父母について作文を書かせた、という実践がありましたか、この題 材は、もし父母の仲が悪い 片親であるといった 環境の中にいる子にと、とても作文にできるような 題材ではないと思えます。子どもが辛い思いをせずに 素直に文字にできるような題材を考える事は、作文 を書きおける側の子どもに対する 最低限の配慮だと思えます。
- 6.5 近頃 私は 文章(特に長いもの)を書くことに楽しみを 感じる事ができません。小学生の頃は 作文が大好きで 厚紙用紙に何枚も書いたものでした。近頃は 書きたいという欲求が減少して しまいました。多分、今まで受験その他で 小論文 レポートといったものを書きすぎてしま、たからだ と思えます。子供が書きたいと思うような環境作りは とても大切な事だと思えます。
- 6.12 今日見た 赤木先生の授業研究は 先生もおっしゃった通り 発問が 授業の中で 効果的 に使用されていると思えます。しかし 最後の方が 赤木先生の反省にもあるように 時間切れと なってしまったように見え、とても残念でした。けれど、授業記録における 子どもの発言はいま いきしているように感じられ、こうした子どもの関心度を高める作業(?)は 見習うべき事と思えます。
- 6.19 紺野先生がおっしゃった「子どもたちが 裸になっているのに 教師が 裸にならないのはおか しい」といった言葉に 感銘をうけました。私も同感です。子どもたちが 彼ら自身の事を ありのま まに伝えてくれるのですから、教師も ありのままにうけとめる必要があると思えます。
- 6.26 今日の紺野先生のお話は、実話だけに 胸にくるものがありました。自分の3代ぐらい前をさか のぼりた歴史をみめることの大切さを あらためて 教えていただいたような気がします。子どもたちが 知る今だけでなく 知らない身近な過去を 知らせることは 子どもたちの人間に対する 愛情を より深いものにする事が できることだと思えます。

- 7.3 'のびろうはびびんです、のびろレポートを今日仕上げたわけだが、何れもよむとどうと、いいのかわからなくなってしまった。よめばよむほど味がでるといった具合である。こうした子供達の作文にふれる機会が毎週あることは、私の大きな収穫となっているようである。
- 7.10 他の班のレポートをみて、いろいろな考え方があつたな、とあらためて思った。こういった人それぞれの考え方を、教師はどのようにとらえるべきなのだろうかと、今日考えた。(つまり子どもたちがとらえた考え方を、どのように指導する際いふせばよいか、という事である。)
- 9.11 今日の授業の中であらわそうとしたこの中心の解釈で2つの意見がでていたがこうした解釈を吉田さんの解釈に近づけていくことが大切だと思ふ。このことで、彼のおみれている家庭環境、性格等をもっと知ろうとしなければ本当の解釈はできないと思ふ。つまり教師は、児童のことを知ることが本当の解釈ができると思ふのである。
- 9.18 子ども達の作文を読めば読むほど自分のはずみになる。なぜなら、私か今、文を書く場合考える事は「うまい、といわれる文をかくためには」という事であるが子ども達の作文は自分が書きたい事を素直に書いているからである。作文にテクニック等は二の次であると思ふ。自分が本当に書きたい事を書いた作文は技巧ではおきなえない。キラキラしたものがめれると私は思ふ。

## 〈感想カードの記述例 2〉

- 10/17 声を出して読む。ことは、大学では初めてだったと思ふ。ほろほろが先出しましたけれど、音を出して楽しむことができました。'ほろほろ。'という気持ちにとらわれながら、時代がなつかしくなりました。
- 10/24 先生があまりに調子よく、そしておもしろく読んでいるのを聞いていると、ほろほろがるのは損な気がしてきました。教師の姿にばかりは、子どもたちにも悪い影響を与えるし、第一、子どもの本当の姿・子どもらしさを引き出されてこないだろう。ここからの授業が楽しみになってきた。
- 11/7 レポートは、あとがとんとんつながるし、また、新しい独自の作品も作る事ができるので楽しい。なつかしいと思いつながら読んで。ごんぎつねの朗読が最初よりも上手になつたような気がした。これは読むことに慣れてきたからだろうが。
- 11/14 授業の記録は私が気がつかないことだらけで、非常に勉強になった。私は物語の解釈を無意識に決めつけてしまう傾向があるようだ。永田実践は一つ一つ授業が着実に進んでいて、子どもたちの理解が明確になっていくようで、私はすばらしいと思つている。
- 11/21 先生が録音で授業の感想を聞いて、みんながしゃべりたがることを聞いて驚いた。自分の考えの目こぼしに気がした。(注3)
- 11/28 指導案づくりで苦労したことは、平時のめあてと理解する上で、どんな順序で授業を行うか、どんな発問をすればよいか、ということであった。永田さんの実践にのっとり案を考えたが、永田さんの発問が適確であること、子どもたちが生き生きと授業にとり組んでいる姿が想像できるなど、非常に参考にすることが多かった。

- 1/5 非常にほろろしい1時間でした。先生からの即席をいただき、ポイントを知ることができたので光学に思いつく。まだまだ表面的なところしか見ていないことに気づきました。一度に良いものを作ろうとせず、少けた視点を下へと思いつく。<sup>注(4)</sup>
- 1/12 自分の授業案をよいものにしていこう。と思えて見えていた。とんどもん具体的になって進歩していくことだろう。今回の手直しは、ちよとしたまじかたで 教習所 直すことができました。
- 1/19 また新しい視点での教材理解の手がかりを得た。教材理解にはいろいろな方法があると思つた。一面的な方法ではなく、多面的な方法で理解していることが大切なのだろう。「い、ほんご 4ヶ上」を使った講義を昨年受講した。す、かり忘れていた。文法の問題にあつたが その知識を使うのではなく、あらゆる場面(教材など関係なく)で利用できると思つた。
- 1/16 今度の「論説文は嫌い」と思っていたのですが、今日のプリントの内容は いいことが書かれてありました。どんな授業をするか によつて、論説文を楽しく読むことができると思つました。「少なくていい」のことと 私をよく知らずに いました。もう忘れようはないんじゃないかと感じます。
- 1/23 ちよめのプリントを読み、自分の作品解釈は「思入れ読み」でいい、「甘、ちよい感情に満ちている」と思つた。何れも、言葉に沿つた読みをしていなければいけません。一つの表現にこんなに様々な解釈ができることを知り、授業案作成の前には先生が、「作品解釈をしっかりとしない」という言葉と思つた。
- 1/30 記憶をたどつてみると、説明的な文章などは、段落の意味を考へていただけの授業だと思つた。この教材の授業で、小学生の気持ちとあはれと考へてやるのが楽しく、また、イメージや語彙的・文法的進歩と 同時に教材解釈ができることを知つた。西村さんの、思つたことをいかに考へていくか見ると 非常に気持ちよく、ほろろしいと考へて 言つたことばいえないのはほろろしい と思つた。
- 2/6 ほろろしいかな文字の相違で、どうしてトリーニが 必要なか、しかも運動していきながら学習しているのはほろろしいのか、と思つた。しかし、内容を聞いていながら、今では 忘れられている文字も、難しいポイントもあるのだと 思つた。また、楽しながら学習していくことが大切であると感じた。

所を持っているか。これは、慎重に追究してみなければなるまい。

(3) 目的・方法上のつながり

「初等国語科教育法」は、「あり方」すなわち方法学の科目である。一見、スタティックな知識内容の学に見える「小専国語」の内容とは趣を異にするかのようである。しかし、安定した学に一見スタティックに見える蓄積があること、学と言われるものに方法論や方法論史が当然あること、そしてまだ若い学問である国語科教育学には、安定的な目的論や方法論がないこと等々、両科目のこの面でのつながりを考える場合の問題はたくさんある。実践を通しつつ、高度の対象化を図って究明に努めたい。

2 両科目と他科目とのつながり

両科目間のつながりを考える場合に、少なくとも国語系専門科目とそれぞれがどうつながっているかを考慮しないわけにはいかない。国文学方面

漢文学方面とは、両科目とも直接している。

3 学生の研究の発展ぶりとは二科目のつながり

学生が、一年間の中で、あるいは2年次3年次の二年間の中で、科目の研究をどう発展させているのか。こういう動態を具体的にとらえていくことの大事さは、殊更記すまでもないだろう。そしてそういう中で二科目のつながりが、事実として学生の中にどのように生じているものか。これこそ実に知りたいことではある。

注(1) 国語教育研究大辞典(明治図書'88) p.301

注(2) 「科学教育における読書指導」『学校図書館』誌 '66.2

注(3) 「感想」とは、前回授業の際に記した感想。

注(4) このとき、このカード記述者の授業案が、他の2人のものと共に、全員の参考として吟味された。